

1 生き物たちのつながり

どんぐりとカケス

ミズナラの果実(どんぐり)は豊富な栄養を含んでおり、さまざまな鳥や哺乳類^{ほにゅうい}の大事な食べ物です。そのなかでカケスやアカネズミは、どんぐりを運んでためこむ習性があります。落葉の下などに埋めて隠し、冬に掘り出して食べますが、一部は食べられずに残されます。どんぐりは乾いた場所では数日で死んでしまいますが、埋めてくれるおかげで、適度な湿気のある環境で生き延び、春になって芽を出すことができます。こうやってミズナラは、子孫を新天地に送り出しているのです。

どんな生き物も単独では生きられず、別の種類の生き物と常に関わり合い、さまざまな形の〈つながり〉を結びながら生きています。北海道の豊かな自然も、そのような生き物どうしの〈つながり〉によって支えられています。

例えばアカネズミは、昆虫や木の実を食べる一方、キツネやクロテンなどに食べられることもあります。このような「食べる」「食べられる」という関係の〈つながり〉を、「食物連鎖^{しょくもつれん}(食物網^{さもう})」とよびます。あらゆる生き物は、食物連鎖のなかで独自の位置を占めています。死んだ動物の体も新たな食物連鎖の出発点となります。シカが死ぬと、すぐにハエがやってきて卵を産みます。孵化^{ふか}したハエの幼虫(うじ)や、シテムシなどの甲虫が、シカの体を少しずつ食べていきます。ハエの幼虫を食べるエンマムシなども集まります。最後には菌類(キノコ・カビの仲間)によって分解され、土にかえります。植物の死んだ体ともいえる落ち葉や枯れ木も同様です。動物の糞^{ふん}も、オオセンチコガネなどの昆虫が食べ、菌類に分解されます。

〈つながり〉の形は、食物連鎖だけではありません。同じ食べ物を食べる動物どうしが食べ物をめぐって競合する、植物どうしが日光や土の中の養分を奪い合うなどの「競争関係」も一つの形です。また、1本の大木には枝先のガの幼虫から幹の穴を巣に使うフクロウまで多くの生き物がくらしているように、ほかの生き物にすみかを提供するという形の〈つながり〉もあります。森の木々は、繁った葉で日光をさえぎり、地面を極端な乾燥や温度上昇から守り、ほかの生き物が生きやすい安定した環境を生み出しています。虫に花粉や蜜を与える代わりに、花粉を運ばせる植物もいます。樹木の多くは、その根が土の中の菌類とつながっており、土の中の養分をもらう一方、光合成でつくった養分を菌類に与えています。このような、お互いに利益を得るような〈つながり〉は、「相利共生^{そうり きょうせい}」とよべれます。



サケが森と海をつなぐ

川底で卵から生まれたサケは、春になって海に下り、遠くまで回遊しながら大きく成長し、4～5年後にふるさとの川に戻って産卵し、一生を終えます。川に上ったサケはヒグマやキツネにとってはごちそうです。死んだ後も多くの生き物に食べられ、微生物によって分解され、最終的には周囲の木々が育つ栄養にもなります。サケは、海の豊かな栄養を森に運んでいるのです。現在、多くの川で、戻ったサケの大部分はヒトに捕まるため、海と森とのつながりが断ち切られてしまっています。



海と陸の間をつなぐ

川から流れてきた落ち葉は河口にたまり、ヨコエビなどの小さな生き物の食べ物となります。ヨコエビを主に食べる魚もいます。沿岸の生き物のつながりの一部は森によって支えられています。一方で、海岸にはさまざまな物が漂着^{ひょうちゃく}します。打ち上げられた海藻はハマダンゴムシなど砂浜の小さな生き物の食べ物になります。魚やイルカ、時にはクジラが漂着すれば、海辺の鳥類やキツネ、ヒグマなどにとってはごちそうです。漂着物は海から海岸へと栄養を運び、海と陸の生き物をつないでいます。